

特別報告

韓国の産後療養院の視察

西村真実子¹ 吉田和枝¹ 米田昌代¹ 堅田智香子¹
 東雅代¹ 和田五月¹ 曾山小織¹ 金川克子¹

キーワード 産後療養院, 育児支援, 虐待予防, 韓国

1. はじめに

近年の子育ての意識調査によると、過去20年間ほどで、子育てに対して不安や困惑、困難感、不適格感などのネガティブな思いを訴える母親が増えている。子育てに不安を感じたことのある者は8割を超え、「どうしたらいいかわからない」と困惑したことのある者が約6割、子育てをするのが困難だと感じたことのある者が約4割を占める^{1~3)}。このような母親のネガティブな思いは「育児不安」と総称され、暴言や暴力などの虐待に繋がる場合もある。子どもへの暴言や暴力の実態については、どのようにそれを質問するかにより調査結果に違いがみられるが、おおよそ1~4割の母親にあるとされている^{4,5)}。

育児不安や虐待の増加には、子育て家庭の孤立化が大きく関与していると考えられている。核家族化、地域社会の交流の減少、少子化は、かつて家庭や地域社会にみられた、子育ての知恵の伝承やモデル学習、世代間や住民相互の相談・サポート機能を失くした。また、‘子育ては母親がするもの’とする伝統的な性別役割意識や、家庭よりも仕事を優先する社会の風潮は、父親不在の子育ての現状を容認する傾向を作っている。さらに、我々は無意識に‘女性は母性的に育児ができるはず’と考えおり、このような意識が無言のうちに母親にプレッシャーを与えていることも考えられる。近年のこのような社会環境が、子どもや子育てに慣れていない、あるいは子どもや子育てをイメージしにくい親を生み、そのような親が情報社会の中でストレスを抱えながら一人で子育てをしているのが現状であると思われる。さらに、母親の育児不安や子育て家庭の孤立化は子どもの育ちに悪影響を及ぼす可能性があり、近年の若者に共通してみられる傾向として、自信のなさや対人関係能力の低さが指摘されるが⁶⁾、これらはこのような子どもを取巻く環境の変化が子どもの育ちに悪影

響を及ぼした結果ともいえる。そして、そのような若者が親になり、不安を感じながら子育てをしていくというように、世代を通して子育てや虐待の負の連鎖が起っているのではないかと危惧される。

このような負の連鎖を絶つための支援は、妊娠中や周産期のできる限り早期から行うことが重要である。しかし、支援対象者をスクリーニングしたり、虐待の語句を用いて誘うことは、結果的に彼らに「虐待リスクのある問題のある親」、「駄目な親」というレッテルを貼ることになったり、侵略的介入となってしまう可能性がある。

そこで、誰もが気軽に訪れることができる施設などで、虐待予防も視野においた子育て支援を行うことが重要であると考えた。虐待予防の子育て支援には、安心して子どもと離れる時間を確保するというレスパイトケアとしての機能と、かつて地域社会のあらゆる場面でみられた「子育ての知恵の伝授やモデル学習、相互サポート・相談の機能」を備えていることが重要であると思われる。

現在の社会通念では、仕事や冠婚葬祭などの特別な理由がない限り、母親が子どもを預けることは好ましくないこととされる傾向が強い。しかし、母親たちが訴える子育てに伴う不安や不快感、いらいら、攻撃衝動性、子どもへのネガティブ感情に対処することは、親自身の子ども時代の傷つき体験(被虐待経験を含む)が関連している場合もあり、容易ではない。そこで、一旦子どもと離れ、エンパワーできる空間において、自分の子育てを振り返る時間をとることが重要になってくる。母親たちは母としての不適格さに悩み、自責感が強いとともに、人に対し緊張や警戒心、不信感が強いこともあるので、託児や支援活動の利用自体に消極的な場合もある。したがって、虐待予防も視野に入れた子育て支援においては、レスパイトケアとともに、母親の思いに配慮した情緒的ケアや相談の機能を備えていることが重要である。

¹ 石川県立看護大学

また、子育ての知恵の伝授やモデル学習の機能については、具体的な子育てスキル(例えば、しつけやいらいら対処法等)を、子育て経験や生活時間の共有を通して自然に学べるようなプログラムにより具現化できるのではないかと考える。先に述べたような誰もが気軽に利用できるような施設において、親役割をサポートする、参加者主体型の「ペアレンティング・プログラム」や、宿泊型の支援プランを設け、母親がニーズに応じてこれらを利用するというスタイルが望ましい。

このように考えていたときに、韓国において「産後療養院(または産後ケアセンター)」という施設があるという情報を得た。産後療養院は出産施設ではなく、産後に親子が過ごす施設であり、これまで述べてきたような虐待予防をも視野においた子育て支援活動の一つのスタイルとして参考になるのではないかと考えた。

2. 視察目的

韓国の産後療養院のねらい、設立の背景、運営方法、プログラム内容、利用実態、効果、課題などについて情報収集し、日本における子育て支援活動の参考とする。

3. 視察施設

我々は、まず今回の視察をコーディネートしてくださった柳光銖教授の属する全北大学看護学部で、韓国の産後療養院の制度・現況と日本の子育ての状況などについて、情報交換を行った。その後、4か所の産後療養院(個人の産科病院併設の産後療養院、和漢薬総合病院の産後療養院、私立総合病院経営の産後療養院、看護師経営の産後療養院)と保健所等を訪問し、情報収集とともに、職員の方々との意見交換を行った(表1)。

表1 視察施設

視察先	地域
1) 全北大学校看護学部 2) 和漢薬病院産後養生院 3) ハン産後療養院 4) 全州市保健所	韓国 全州市
1) 漢陽大学 2) 大日病院産後療養院 3) V I P産後療養院	韓国 ソウル市

4. 産後療養院について

韓国においては、出産に伴う入院は数日のみのことが多く、産後療養院は産後の養生と子育て支援のために設立された。しかし、出産後の全ての

女性が利用するわけではなく、‘産後のより良い養生をしたい’‘子育てや家事を助けてくれる人がいない’‘子育てに自信がない’‘人を雇うよりは費用がかからない’などの動機を持つ者が利用していた。利用日数は、1週以内が6.6%、1週間～2週以内54.1%、2週～3週以内34.7%、3週以上4.6%であり(2001年全国調査)、9割の者が2～3週間の利用であった。また、おおよそ半数の産後療養院において、15～20室程度の個室があり、1日に10～15名、1月に20名程度の母親が利用している(2001年同上調査)。視察した4つの産後療養院もほぼ同じ状況であった。病院直営や専門職者による開設の施設は少なく、ほとんどが専門職以外の個人か、チェーン形態の運営である。

提供されている看護サービスは、褥婦と新生児のヘルスチェック、乳房マッサージ、授乳指導、産後体操、保養食の提供等であるが、4施設のうちの1～2施設で行われていたものとして、育児相談、ヨガ、アロマを使った部屋での石鹸作り(おしゃべり)、子どもの遊具作成があった。また、毎日、余裕のないようなスケジュールを決めて、母親が不安にならないようにしているという施設もあった。視察した施設ではみられなかったが、家庭訪問を行っている施設が多いということであった。産後療養院に関する詳細な情報は別稿で報告する予定である。

5 終わりに

韓国においては、少子高齢化社会に対応するための基盤構築事業が2006年からの10年間で計画されており、保健所長の話によると、出産と子育てに対する取り組みはこれから行われるとのことである。しかし、従来から行われている、産後療養院のような宿泊型の子育て支援スタイルと、そこで築かれた母親との信頼関係を基にした、その後の育児相談・家庭訪問によるサポートシステムは参考になる点があった。我々がめざす虐待予防を視野に入れた子育て支援は産後だけでなく、子どもの発達段階のどの時期においても利用可能であることが望ましい。産後療養院を参考にしつつ、日本の子育ての現状に即した、より多角的に支援プログラムを検討していかなければならない。

本視察は、平成18～20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(研究代表者 西村真実子)を受けて実施した。

文献

- 1) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援．兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防，2006
- 2) ベネッセ教育研究開発センター：第3回幼児の生活アンケート報告書 国内調査．87，2006
- 3) 社団法人日本小児保健協会：平成12年度幼児健康度調査報告書．2001
- 4) 徳永雅子，大原美和子，萱間真美：首都圏一般人口における児童虐待の調査．厚生指標，47（15），3～10，2000

- 5) 高窪美智子，西村真実子，津田朗子，関秀俊，田屋明子，井上ひとみ，林千寿子：育児における暴力・暴言の実態と背景要因の関係．石川看護雑誌，3（1），11～20，2005
- 6) 石川県若者しごと情報館 ジョブカフェ石川，若者の進路・職業選択のために～親として知っておきたいこと～．2006

（受付：2009年1月9日）



全北大学看護学部の先生方と



ハン産後療養院の室内：足浴を体験して



V I P産後療養院の玄関前（ビル内部）

Visitation to Postpartum Care Centers in Korea

Mamiko NISHIMURA, Kazue YOSHIDA, Masayo YONEDA, Chikako KATADA,
Masayo AZUMA, Satsuki WADA, Saori SOYAMA, Katsuko KANAGAWA